



第17回日本地震工学シンポジウム和文論文フォーマット

佐藤太郎¹⁾, 鈴木義男²⁾, 石川順太³⁾

1) 東西建設技術研究所, 室長 博士 (工学)

E-mail: sato-t@tozai-tri.co.jp

2) 南大沢大学工学部建築学科, 教授 工博

E-mail: yoshios@mou.ac.jp

3) 朱雀市庁, 主幹 修士 (理学)

要 約

本文は第17回日本地震工学シンポジウムの論文を作成・投稿する際に必要となる書式や遵守事項をまとめたサンプル文書である。論文などは以下に記す書式に従ってワード・プロセッサなどにより10ページ以内で作成する。投稿する際にはAdobe Acrobatを用いてPDF形式のファイルに変換し、その容量が10MB未満になるようにする。投稿先は第17回日本地震工学シンポジウムの論文投稿サイトである。なお、本書式は日本地震工学論文集の書式との違いが最小限となるように作成されている。

キーワード： 地震工学, 鉄筋コンクリート, せん断

1. 用紙のサイズ, 余白など

用紙サイズはA4判として, 上の余白は25 mm, 下の余白を35 mm, 左右の余白を25 mmとする。ただし, 1枚目だけは, ヘッダを設ける関係から上部余白を40 mmとする。1段組に設定して, 46字×45行 (多少の前後は認める) に設定する。なお, 要約部分およびキーワードの左右の余白は35 mmとする。

見本を参考にして, 題名, 著者名, 所属, 要約, キーワード, 本文, 参考文献, 英文タイトル, 英文著者名, 英文所属, 英文要約, 英文キーワードの順に作製する。

2. 題目

論文タイトルは14 ptのゴシック体を用いて中央に印字する。

3. 著者名および所属

題目から2行の空白のあとに, 著者名を14 ptの明朝体で中央に記入する。著者名の下に1行空白を設けてから, 所属を中央に記入する。電子メール・アドレスを所有する場合には必ず記入する。和文は10 ptの明朝体で, 英数字は10 ptのTimes New Roman体で記述する。

4. 要約とキーワード

所属の下に3行の空白をおいて要約を記述する。なお「要約」は10ptのゴシック体で中央に印字し、要約本文は10ptの明朝体で記述する。

要約の下に1行の空白をおいてキーワードを10ptの斜体の明朝体で左寄せで記述する。

なお、要約中において既往の研究について文献をあげて述べたい場合には、後述の本文中で用いる右上添字の文献番号は利用できないので、著者と発刊年を用いる。（例：「本研究ではPaulay (1976)の手法を拡張する。」）

5. 本文と見出しなど

5.1 本文

キーワードから2行の空白をおいて、本文をはじめめる。フォントについては、和文は10ptの明朝体で、英数字は10ptのTimes New Roman体で記述する。章の見出しについては、和文は10ptのゴシック体、英数字は10ptのArial体として、1行空けて本文を続ける。章の見出しのピリオドは半角「.」で、半角の空白のあとに見出しを続ける。本文の句読点は全角の「，」と「。」で統一する。段落設定は両端揃えの配置とする。

「1.0m」などのように単位の前には半角スペースを挿入する。ただし、秒、度などの漢字の単位や%の前は挿入しなくてよい。

半角文字の等号「=」を用いるときは前後に半角スペースを挿入する。また、マイナス記号には「-」を使用し、ハイフン「-」は使用しない。

5.2 節の小見出しなど

節の小見出しも和文は10ptのゴシック体、英数字は10ptのArial体として、節番号の前のピリオドは半角「.」とし、半角の空白のあとに見出しを続ける。改行してすぐに本文を続ける。各段落の先頭は1字下げで始め、段落間には空白を設けない。

5.2.1 項の小見出しなど

項の小見出しも10ptのゴシック体として、改行してすぐに本文を続ける。項の間には空行は設けない。項の見出しのピリオドは半角「.」で、半角の空白のあとに見出しを続ける。

5.2.2 箇条書き

箇条書きに番号をつける場合は、右片括弧付きの番号1), 2), …を用いると参考文献の番号と紛らわしいので、①, ②, …や, [1], [2], …などを用いる。

6. 数式

数式は中央に印字し、式番号は(1), (2), …として式の最後に右寄せして記す。なお式の上下には1行ずつの空白を設ける。本文中で式を引用する場合は式(1)のようにする。

$$V_u = P_w \sigma_{wy} b j \cot \phi + b D (1 - \beta) v_0 \sigma_B \tan \theta^* \quad (1)$$

7. 図・写真・表・脚注

図・写真・表には番号とタイトル（キャプション）を付ける。図・写真のキャプションはその直下に、表のキャプションはその直上に記入する（図1, 表1を参照）。キャプションのフォントは、和文は10ptのゴシック体、英数字は10ptのArial体とする。図・写真・表の呼称は図1, 写真1, 表1, のようにして、論文全体を通して番号を振り付ける。図2のように(a), (b), …と枝番号を付けてサブキャプションを設け、関連する複数の図を並べてもよい。図・写真・表が複数のページに渡る場合には、各ページにキャプションを設け、一連のものであることがわかるようにキャプションに記述する。なお、図・写真・表の左右には、原則として文字を流し込まない。図・写真・表は本文から1行空けたあとに貼付する。

図・写真・表はカラー表示とすることを認める。
 脚注¹を入れる場合の書式は、ここに示すとおりである。

表1 観測地震動

日付	時刻	1F		5F		
		計測震度 相当値 (水平2方 向による)	最大加速度 (m/s ²)		最大加速度 (m/s ²)	
			N/S (梁間)	E/W (桁行)	N/S (梁間)	E/W (桁行)
10/23	17:56	4.4	0.72	1.07	1.78	3.26
	18:03	3.1	0.23	0.27	0.51	0.68
	18:12	3.1	0.12	0.25	0.43	0.70

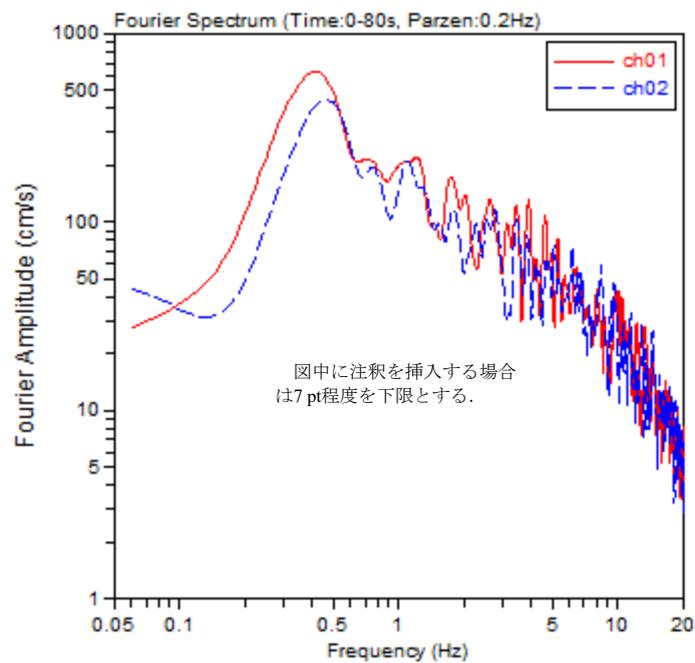


図1 観測波のフーリエスペクトル

¹脚注が必要な場合には引用ページの直近に、左端から50 mm程度、0.5 pt幅の線を引いた下に、2行程度の範囲で10 ptの明朝体で記述する。

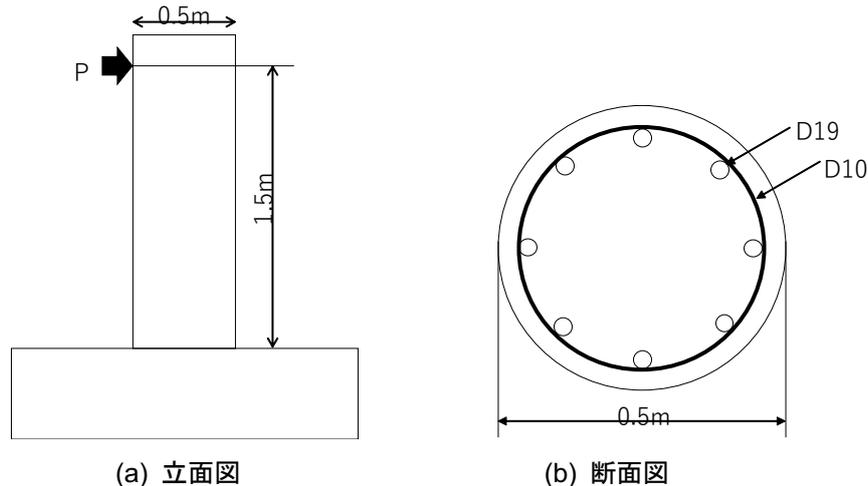


図2 実験試験体（キャプションが長くなる場合にはこの例のように改行する。1行目のキャプションと行頭が揃うようにインデントする）

8. 使用する単位とフォント

単位は原則としてSI単位系に統一する。また、SI単位系に従い、「sec」ではなく「s」を用いる。「Gal」は初出の箇所に cm/s^2 と同じ意味であることを説明する。

9. 謝辞、付録、参考文献

謝辞がある場合には、本文の結論の後に和文は10 ptの明朝体で、英数字は10 ptのTimes New Roman体で記述する。

付録がある場合は、謝辞と参考文献との間に記載する。付録が複数ある場合は、さらに連番を付けた見出しをつけて記載する。

参考文献のリストは、10 ptの明朝体で記述する。参照した順に番号を振って、結論、謝辞のあとに、記載例に従って記載する。

参考文献のページ範囲はハイフンではなく en ダッシュ「-」を用いる。Vol., No., pp.の後ろに半角スペースを挿入する。出版年の情報は年までとする。報告書や書籍などの全頁を示す場合はpp.を用いる。

URL にハイパーリンクは付けない。閲覧日を「(参照 2020-05-01)」のように記載する。

本文中での参考文献の表示は、該当箇所に文献番号を右上添字で1), 2), …と記す。著者を含めた記載としたい場合には次の例文を参考にされたい。「この研究はPaulay¹⁾によって始められた。その後、久保・小原²⁾、建築・白川³⁾、高畑ら⁴⁾、Takeuchi et al.⁵⁾によって発展した。1980年代までの研究成果^{1), 2)}と比較すると、それ以降の研究成果³⁾⁻⁵⁾では…」

10. 英文題目、要約など

参考文献のあとに2行の空白を設けて、英文の題目、著者名、所属、要約およびキーワードを記述する。題目、著者名、所属は中央に印字する。ただし、英文題目以降が2ページにまたがる場合には、ページ数の上限の範囲内であれば、適宜改ページしても良い。

英文題目は14 ptのTimes New Roman体のBoldとする。1行空けて英文著者名を14 ptのTimes New Roman体で記述する。英文所属、要約およびキーワードは10 ptのTimes New Roman体として、キーワードは*Italic*で記述する。なお、「**ABSTRACT**」はBoldで中央印字する。著者名、所属、要約およびキーワードのあいだにはそれぞれ1行の空白を設ける。

謝 辞

本論の作成に当たっては、日本地震工学会論文集編集委員会の委員各位のご協力を得ました。記して御礼申し上げます。

付 録

付録はここに記載する。単一の場合にはこのようにする。

付録1.

複数ある場合には、さらに連番をつけた見出しをつけて、順に記載する。

付録2.

複数の付録の間は1行空ける。

参考文献

- 1) Paulay, T.: Moment Redistribution in Continuous Beam of Earthquake Resistant Multistory Reinforced Concrete Frames, *Bulletin of New Zealand National Society for Engineering*, Vol. 9, No. 4, pp. 205–212, 1976.
- 2) 久保哲夫, 小原明: 連成する鉄筋コンクリート造骨組の終局時の変形と水平力分担に関する研究 (その1: はり崩壊と柱崩壊のフレームを並列した場合の変形), *日本建築学会大会学術講演梗概集*, Vol. C, pp. 719–720, 1987.
- 3) 建築健太郎, 白川華花: モルタル板を用いたブレースの実験的研究, *日本建築学会構造系論文集*, Vol. 77, No. 777, pp. 778–787, 2016. DOI: <https://doi.org/10.3130/aijs.77.778>
- 4) 高瀬国雄, 天野允, 山下進: 地震によるアースダム被害, 土と基礎, Vol. 14, No. 10, pp. 3–8, 1996.
- 5) Takeuchi, S., Yamazaki, T. and Kajishima, T.: Study of Solid-Fluid Interaction in Body-Fixed Non-Inertial Frame of Reference, *Journal of Fluid Science and Technology*, Vol. 1, No. 1, pp. 1–11, 2006.
- 6) 蔦原道久, 片岡武, 田村明紀: 差分格子ボルツマン法による界面活性剤のSISに関する研究, *日本機械学会第16回計算力学講演会講演論文集*, pp. 121–122, 2003.
- 7) Tanaka, H. and Park, R.: Experimental Study on Effectiveness of Interlocking Spirals as Lateral Reinforcement for Reinforced Concrete Columns, *Summaries of Technical Papers of Annual Meeting, Architectural Institute of Japan*, Vol. C, pp. 531–532, 1989.
- 8) 地震調査研究推進本部地震調査委員会: 「長周期地震動予測地図」2012年試作版, 2012, http://www.jishin.go.jp/main/chousa/12_choshuki/index.htm (参照2015-01-01).
- 9) 地震調査研究推進本部地震調査委員会: 「全国を概観した地震動予測地図」報告書, 2005, <http://www.jishin.go.jp/main/> (参照2006-01-21).
- 10) 安田進: 液状化の調査から対策工まで, 鹿島出版会, 243 pp., 1988.
- 11) Kramer, S. L.: 7.2.2 Nonlinear Approach, *Geotechnical Earthquake Engineering*, Prentice Hall, pp. 275–279, 1996.
- 12) Aki, K. and Richards, P. G.: *Quantitative Seismology*, 2nd ed., University Science Books, 700 pp., 2002.

Instruction Format

for the 17th Japan Earthquake Engineering Symposium

SATO Taro¹⁾, SUZUKI Yoshio²⁾ and ISHIKAWA Junta³⁾

1) Manager, Technical Research Institute of Tozai Construction, Dr. Eng.

2) Professor, Minami Osawa University, Dr. Eng.

3) Senior Engineer, Suzaku City Office, M. Sc.

ABSTRACT

This paper presents format and some rules for papers of the 17th Japan Earthquake Engineering Symposium. Paper title and authors' names should be written in both Japanese and English. A title in Japanese is typed in Gothic font of 14 pt, and a title in English in bold style of Times New Roman font of 14 pt. Authors' names in Japanese are typed in Mincho font of 14 pt, and those in English in Times New Roman font of 14 pt. Other texts should be typed in Times New Roman font of 10 pt.

Keywords: Earthquake engineering, Reinforced concrete, Shear